かるちゃ～ナビ

# ザ・見遊（みゅ～）じあむ

## 浜寺公園駅（堺市）

46

かつては年間100万人の海水浴客が出入しました

### 明治生まれの木造駅舎 ギャラリーとして市民に開放

明治の建築物である南海本線・浜寺公園駅舎は1907年（明治40年）、日本近代建築の草分けで、東京駅舎の建築も手がけた辰野金吾氏が設計しました。当時は「ひと夏100万人」と言われた海水浴客に対応するために、南海電鉄は難波～浜寺公園駅間を電化。「東洋一」といわれた海水浴場の玄関口にふさわしい建物にしようと、この駅舎を建設したといいます。建物は、柱や梁を表に現したハーフティンバーとよばれる様式で、白木、白壁つくりの洋風建築は、築100年以上を経た今でも新鮮な趣きを見せています。1998年に国の有形登録文化財に指定されました。駅舎の旧一等待合室はステーションギャラリーとして開放され、絵画、写真、生け花などの展示で市民に親しまれています。2018年には鉄道が高架化されることになり、駅舎は一時は解体・撤去される噂もありましたが、市民の運動で保存が決定。高架工事後は新駅の隣に移築される予定です。

プラットホームにも昔の面影が

**ミュージアムメモ**

▶所在地／堺市西区浜寺公園町２丁▶交通／南海本線・浜寺公園駅、阪堺軌線浜寺駅下車東へ徒歩３分▶ステーションギャラリーの開館時間／午前10時から午後８時まで。月曜日、年末年始休み

# このシネマがえいが

## 「蟹工船」

### 小林多喜二の名作 55年ぶりに再映画化

蟹工船（かにこうせん）は、1929年に全日本無産者芸術連盟の機関誌である雑誌『戦旗』で発表された小林多喜二の小説です。昨年は、労働者の派遣切りなどの雇用破壊のもとで、原作が160万部のベストセラーになり、「蟹工船」が流行語大賞のトップテンになるなど社会現象になりました。

1953年に山村聡監督で製作された「蟹工船」が新たな装いで再映画化されました。原作の小説には特定の主人公がおらず、蟹工船にて酷使される貧しい労働者たちが群像として描かれていますが、今回の映画では、虐げられる労働者と、労働者たちを酷使する鬼監督にスポットをあてています。

北洋のカムチャツカ沖。蟹を採り、船上で缶詰に加工する蟹工船「博光丸」では、出稼ぎ労働者たちは劣悪な環境におかれ、安い賃金で酷使されていました。監督の浅川（西島秀俊）は彼らを人間扱いせず、労働者たちの中には過労と栄養失調で命を落とす者も続出しました。

こうした状況の中、労働者の一人、新庄（松田龍平）は船から脱出し、幸運にもロシア船に救助されます。そこで全く別の世界を目にした新庄は、蟹工船に戻りみんなに「いまの状況に甘んじてはいけない」と、一斉蜂起を呼びかけます。しかし、それはあっけなく鎮圧され、新庄は志半ばで倒れてしまいます。それでも労働者たちは新庄の意思を継ぎ、もう一度立ち上がろうとするのでした。

# 摂津 河内 和泉 おおさか三国誌

46

（大阪市北区）

## 天神祭と大阪天満宮 1000年の歴史を持つ浪速の夏の風物詩

大阪の天神祭が今年も7月25日に本宮を迎えます。本宮の夜は大川（旧淀川）に、たくさんの船が行き交う船渡御（ふなとぎょ）があり、奉納花火もあがります。この祭は1000年以上の歴史があり、大阪天満宮（大阪市北区）が鎮座した2年後の天暦5年（951年）6月1日から始まったとされています。大阪天満宮は、平安時代に九州太宰府へ配転させられた菅原道真公にちなんで建立されたもので、地元では「天満の天神さん」とよばれて親しまれています。近くには落語の定席小屋で有名な天満天神繁昌亭や、日本一長い商店街といわれている天神橋筋商店街があります。

大阪天満橋の正門。ここから御輿が出発します

大川を行き交う船渡御

天神祭は江戸時代には、東京の神田祭、京都の祇園祭と並んで日本三大祭の一つに数えられるようになりました。井原西鶴の「世間胸算用」や十返舎一九の「東海道中膝栗毛」などの作品にも登場し、壮大な夏祭りとして描かれています。しかし、幕末には将軍徳川家茂が長州征伐のために大坂城に入城してから、明治4年まで祭は中止に。昭和に入ってからも日中戦争から第二次世界大戦にかけて中止にされた歴史があります。大阪の夏の風物詩として、平和でこそ栄えてきた天神祭。大阪自治労連の事務所は大阪天満宮の近くにあり、7月半ばを過ぎると毎日のように「天神囃子」の音色や、威勢のいい「大阪締め」（手打ち）の声が響きわたります。

# 大阪の戦跡を歩く 第45歩

## 「天皇駐蹕碑」

（和泉市・黒鳥山公園）

### 天皇が帝国軍隊を視察した跡

2メートルの大きな石碑

和泉市の東部の丘陵地にある黒鳥山公園。泉州地域でも有数の桜の名所としても知られ、シーズンは行楽の市民であふれます。階段をのぼりつめた高台の地からは泉州地域が一望できます。高台のこんもり一段高くなった場所に「天皇駐蹕碑（ちゅうひつひ）」と彫られた大きな石碑があります。駐蹕とは、天皇の行幸（ぎょうこう＝天皇が外出すること）中、乗りものを一時とどめることの意味。要するに、黒鳥山で天皇が休憩したという記録を記した碑です。戦前、日本軍国主義のもと、この高台から天皇が帝国軍隊の演習を眺めた歴史をとどめています。

# いまも心に響く 名詩・名歌・名語録

**世に銭ほど面白き物はなし**

井原　西鶴

井原西鶴（1641～1693）は江戸前期に大阪で活躍した作家・俳諧師。「好色一代男」「日本永代蔵」など元禄文化を代表する浮世草子を創作しました。この言葉は「日本永代蔵」の中に出てきますが、金銭や出世を追求する町人の喜怒哀楽を写実的に描写し、「銀（かね）がかねをためる」という元禄時代の風潮をとらえています。お金にまつわる喜怒哀楽は、今も昔も変わらないかもしれません。

**彼らが最初共産主義者を攻撃したとき**

マルティン・ニーメラ

ドイツの牧師で反ナチス行動で知られるニーメラ牧師の詩。「ナチ党が共産主義者を攻撃したとき、私は共産主義者でなかったから何もしなかった。次いでナチ党は社会主義者を攻撃したが、私は社会主義者でないから何もしなかった。ついで学校が、新聞が、ユダヤ人等々が攻撃された。それでも私は何もしなかった。ナチ党はついに教会を攻撃した。私は牧師だったから行動した。しかし、それは遅すぎた」と綴っています。